

## 【研究論文】

# 保育・教職実践演習（幼）の主体的な学びの効果③ －自修時間と意識の変化の関連から－

滝沢ほだか\* 横田典子\* 野田美樹\*

## 要 旨

教職実践演習は、文部科学省によって学生が卒業後に保育者として円滑に働くことができるように、保育者養成校が到達目標に照らし合わせ、最終的に学生の学びを確認する「学びの軌跡の集大成」として位置付けられている。保育士養成課程において「総合演習」から「保育実践演習」に名称が改定された「保育実践演習」の授業内容を踏まえ、本学では平成 29 年度より「保育・教職実践演習（幼）」と名称が変更された。

本研究では、授業の学びの効果について、文部科学省が示した到達目標の達成と自修時間の記録から、学生の意識の変化について明らかにすることを目的とする。質問紙を用いた調査の結果、授業第 1 回と第 16 回を比較したところ、12 項目中 10 項目について、到達目標を達成できたと自己評価する学生が有意に増加していた。また、自修時間と意識の変化の比較においても、互いに影響を与えあっている可能性が伺え、本授業が主体的な学びに一定の効果があったことが示唆された。

キーワード：教職実践演習、保育・教職実践演習、主体的な学び、自修時間、意識の変化

## I. はじめに

現代社会において、保育者には実践力が求められている。教職実践演習（幼稚園）は、文部科学省によって、学生が卒業後に保育者として円滑に働くことができる保育者養成校が到達目標に照らし合わせ、最終的に学生の学びを確認するために、「学びの軌跡の集大成」として位置付けられている。本科目の趣旨を踏まえ、1 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、2 社会性や対人関係能力に関する事項、3 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、教科・保育内容等の指導力に関する事項の 4 つの事項を含めることが適当とされている。平成 22 年度に保育士養成課程において「総合演習」から「保育実践演習」に名称が改定された「保育実践演習」の授業内容を検討し、本学では「教育実践演習(幼)」のシラバスの内容を精査し、平成 29 年度に「教職実践演習(幼)」から「保育・教職実践演習(幼)」へと授業名称の変更を行った。

本研究は 5 年間継続して行っており、平成 26 年度は、協同学修の効果として、集団での学びについて

分析し（山田ら 2016）、平成 27 年度は使命感や責任感、他者理解や学級経営に焦点を当てて研究し（横田ら 2017）、平成 28 年度は、保育内容の指導能力の体得と保育者効力感に視点を置き（横田ら 2018）、一定の成果を示してきた。

そこで今年度は、本学における「保育・教職実践演習（幼）」の学びの効果について、文部科学省が示した到達目標の達成と自修時間の記録から、学生の意識がどのように変化するかについて明らかにすることを目的とする。学生の学びが、どのような意識の変容に結びつくのか検証するために、4 つの事項にそれぞれの到達目標を定め、学生自身が自己評価を行った。そのような自己評価の繰り返し、PDCA サイクルとなり、最終的には振り返りが自分自身を育て、自信に繋がるかどうかについても、明らかにする。

本学の授業内容は、フィールドワーク、グループワーク、ロールプレイングを取り入れており、学生自身が課題をもって主体的に取り組むために、学級経営案や指導計画の立案や行事企画・準備・発表の経験を通して学びの確認ができるように構成され

\*岡崎女子短期大学

ている。グループ活動やクラス活動を中心に行い、教職に関する科目を担当する教員と教科に関する科目を担当する教員と教職経験者がチームティーチングをする形で進めている。教職実践演習の「保育者に必要な資質能力を再認識し、これまでの学修全体をまとめていく演習を通して、保育現場における実践を担うことのできる知識・技能を修得する」という目標を達成することが、保育者としての実践力に繋がっていくことを、どのような経験が、学生の意識を高めているのか、授業の振り返りから読み取っていくこととする。

## Ⅱ. 授業の概要

平成 29 年度の保育・教職実践演習では、幼児教育学科第一部 4 クラス、幼児教育学科第三部 2 クラスを 7 名の教員で担当した。課題確認や個別対応のため、クラス毎に主に担当教員を 1 名ずつ置いているが、基本的には担当教員全員が全クラスをみる、という原則で授業運営を行っている。また、6 クラスの授業に 7 名の教員が配置されているため、クラス担当を持たない 1 名を総括とし、第一部と第三部で分かれて講義を行った際の内容調整や、場所別活動に移ってからの見回りや調整などを担当することとした。卒業学年全員が履修する授業のため、各クラスで差が出ないよう総括が中心となって、授業内容の改善に努めることとした。

表 1 授業内容

回数	内容
1	オリエンテーション 履修カルテの記入 三法令の改訂(定)について
2	付属幼稚園見学の諸注意 幼児教育祭についての説明 全体的な計画と指導計画について (11 月の指導計画の立案)
3	付属幼稚園見学(学級経営の視点から) 各園での園長講話
4	付属幼稚園園長講話 学級経営案に基づき、クラスでの話し合い
5	クラス発表企画案のコンペティション
6~13	各クラスのねらいに従ってロールプレイで表現しながら、カウンセリング・マインドについて学ぶ
14	幼児教育祭前日 (付属幼稚園園を招いてのリハーサル)
15・16	幼児教育祭 1 日目、2 日目
17	総括(振り返り)

本研究における授業内容を表 1 に示す。前年度までの振り返りをふまえ、平成 29 年度は①授業内容の精査、②補講体制の充実、について改善することとした。①については、新たに改訂(定)された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育保育要領についての説明を加えながらも内容を精査し、今まで第 6 回で行ってきたコンペティションを 5 回目に行った。それに伴い、②の補講体制を充実させ、欠席した者については、補講と追加の課題を課し、授業内容の徹底を図った。

## Ⅲ. 調査対象および方法

対象：平成 29 年度本学幼児教育学科第一部 2 年生 167 名及び第三部 3 年生 81 名、計 248 名

方法：

### 1. 保育・教職実践演習到達目標について

本研究では、前年度の研究(横田ら 2018)を踏襲し、表 2 の質問紙項目を用いて毎授業後に調査を行う。これは、文部科学省中央教育審議会からの答申「教職実践演習(仮称)について」の到達目標「①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項」「②社会

表 2 質問紙項目(到達目標)

事項①	項目 1	誠実、公平かつ責任感を持って他者に接し、他者から学び、共に成長しようとする意識を持って、活動に当たることができる。
	項目 2	保育者についての基本的な理解に基づき、自発的・積極的に自己の責任を果たそうとする姿勢を持つことができる。
	項目 3	自己の課題を認識し、その解決に向けて、自己研鑽に励むなど、常に学び続けようとする姿勢を持つことができる。
	項目 4	子どもの成長や安全、健康管理に常に配慮して、具体的な教育活動を組み立てることができる。
事項②	項目 5	他者の意見やアドバイスに耳を傾けるとともに、理解や協力を得ながら、自らの役割を果たすことができる。
	項目 6	集団の一員として、独りよがりにならず、協調性や柔軟性を持って活動にあたることができる。
	項目 7	先生や仲間の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携・協力しながら課題に対処することができる。
事項③	項目 8	誰とでも気軽に顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる。
	項目 9	他者からの指摘を真摯に受け止め、取り巻く状況を理解し、公平かつ受容的な態度で接することができる。
	項目 10	学級の状況を把握した上で経営案を作成し、それに基づく学級づくりをしようとする姿勢を持つことができる。
事項④	項目 11	自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした指導計画を作成することができる。
	項目 12	基本的な知識や技能について反復して伝えたり、環境構成をするなど、心情・意欲・態度を培う指導法を工夫することができる。

性や対人関係能力に関する事項」「③幼児児童理解や学級経営に関する事項」「④教科・保育内容等の指導能力に関する事項」を踏まえて質問項目を設定したものである。また、12の質問項目は5件法（5.非常にできた 4.できた 3.どちらでもない 2.あまりできない 1.全くできない）で回答を求めた。

本研究では授業第1回と第16回（幼児教育祭2日目）の2回を抽出し、「5.非常にできた」「4.できた」と回答した人をポジティブ群（P群）、「2.あまりできない」「1.全くできない」と回答した人をネガティブ群（N群）として分類し、Fisher's exact test を用いて第1回と第16回の変容について検討を行う。

## 2. 自修時間の分析について

ここでは、自修時間と学生の到達目標に対する自信の関係性について、時間外活動記録表の調査から分析を試みる。

時間外活動記録表は、各クラスの活動場所が決定した11月24日にクラスリーダーに配布し、活動日、時間、活動内容を記入するように指導した。提出された第一部4クラスの自修時間を、下記の手順で調査し、多角的に考察する。

なお、本授業は、幼児教育学科第一部2年、第三部3年次に開講されているが、第三部は午前中のみ授業編成で、3年間かけて短期大学の学位を取得する学科であるため、第一部の学生とは自修時間の取り方が大きく異なる。そのため、本研究では第一部を対象を絞って分析を試みる。

### ①自修時間の推移

時間外活動記録より各クラスの自修時間を、授業日から次の授業前日ごとに集計し、1日の平均自修時間を算出し、自修時間の推移を調査する。なお、大学への入校が禁止となる20時から翌7時半、日曜日や入試日等についても、記録が記入されている場合には換算して算出する。

### ②自修時間と到達目標に対する自信の関係性

先に示した表2に基づき、12の質問項目の結果から、時間外活動記録用紙を配布した11月24日より各クラスの12項目の平均を求め、到達目標に対する自信の推移を調査し、その結果をクラスごとに①と照らし合わせ、双方の関係性を考察する。

### ③クラスの活動内容や状況

教員の打ち合わせ記録からクラスの活動内容や状況を確認し、自修時間と到達目標に対する自信の関係性を多角的に考察する。

## IV結果と考察

### 1. 保育・教職実践演習到達目標について

授業第1回と第16回の質問紙調査について各項目別の回答人数を表3に示す。

「非常にできた」と答えた人数は第1回と比較して第16回で大きく増加しており、「できた」「どちらでもない」「あまりできない」「全くできない」と答えた人数は、16回目に減少している。このことから、

表3 各項目別の回答人数

	非常にできた		できた		どちらでもない		あまりできない		全くできない	
	第1回	第16回	第1回	第16回	第1回	第16回	第1回	第16回	第1回	第16回
項目1	17	129	168	98	51	10	11	1	0	0
項目2	21	144	166	87	48	7	11	1	1	0
項目3	29	140	153	87	51	10	12	1	2	0
項目4	9	141	144	83	84	13	6	1	3	0
項目5	46	158	170	72	24	8	4	1	3	0
項目6	31	159	165	72	45	7	4	1	2	0
項目7	47	159	162	73	33	6	3	1	1	0
項目8	51	159	132	69	53	9	8	2	3	0
項目9	37	143	149	87	49	7	11	1	1	0
項目10	10	103	83	98	112	35	34	2	5	0
項目11	10	94	120	94	98	47	17	2	2	1
項目12	7	118	106	92	111	26	22	1	1	1

概ねできたとする方向に回答がスライドしていることが伺える。また、項目 10「学級の状況を把握した上で経営案を作成し、それに基づく学級づくりをしようとする姿勢をもつことができる」と項目 11「自ら主体的に教材研究を行うと共に、それを活かした指導計画を作成することができる」の 2 項目については、事後に「非常にできた」と答えた人数が他の項目に比較して少なく、「どちらでもない」と答えた人数が他の項目に比較して多かったことから、学級経営や、指導計画の作成について、できるという実感を持った学生が、他の項目に比べて比較的少なかったことが伺える。

第 1 回と第 16 回について項目毎に Fisher's exact test で分析した結果を表 4 に示す。

表 4 Fisher's exact test の分析結果

	事前 P 群 N 群	事後 P 群 N 群	P 値
項目 1	185 11	227 1	0.0018**
項目 2	187 12	231 1	0.0009**
項目 3	182 14	227 1	0.0002**
項目 4	153 9	224 1	0.0022**
項目 5	216 7	230 1	0.0346*
項目 6	196 6	231 1	0.0535
項目 7	209 4	232 1	0.1974
項目 8	186 11	228 2	0.0081**
項目 9	183 12	230 1	0.0009**
項目 10	93 39	201 2	0.0000**
項目 11	130 19	188 3	0.0000**
項目 12	113 23	210 2	0.0000**

\*,  $p < 0.05$  \*\*;  $p < 0.01$

12 項目のうち、9 項目（項目 1～4、8～12）において 1%水準で、1 項目（項目 5）については 5%水準で有意差が認められたことから、本授業を通して到達目標を達成した実感を得ていることが示唆される。

その一方で、項目 6「集団の一員として、独りよがりにならず、協調性や柔軟性を持って活動にあたることができる」、項目 7「先生や仲間の意見・要望に耳を傾けると共に、連携協力しながら課題に対処することができる」という 2 項目については、第 1 回と第 16 回の間で有意な差がでなかった。これは、事前でポジティブに捉えていた学生が 200 名前後と比較的多いこと、事前の段階でネガティブに捉えている学生が一桁と少ないことから、本授業を受ける前の段階で、既にできているという実感があることが伺える。授業担当者からは、打ち合わせ内で、クラス内で協調性を持ち、連携して物事に取り組んでいる姿が活動状況からも伺えるとの意見がでた。その一方、相手に合わせすぎて、自分の意見を主張しないことや、周囲の状況に耳を傾けすぎ、積極的に動く姿がみられない、といった学生の課題と表裏一体であるようにも伺える結果となった。

## 2. 自修時間の分析について

### ①自修時間の推移

調査の結果を表 5 と図 1 に示す。

表 5 授業毎の平均自修時間と合計自修時間

クラス 期間	2A	2B	2C	2D
11/24-12/7	55.0			
12/8-12/14	145.0		61.7	
12/15-12/21	200.8	110.0	48.3	
12/22-1/4	115.0	119.2	140.0	
1/5-1/11	166.0	126.0	98.0	112.0
1/12-1/18	136.7	200.0	245.0	356.7
1/19-1/25	298.3	220.0	333.3	525.0
1/26-2/8	375.0	393.0	515.0	538.5
合計時間	11115	8865	11020	11735

(分)

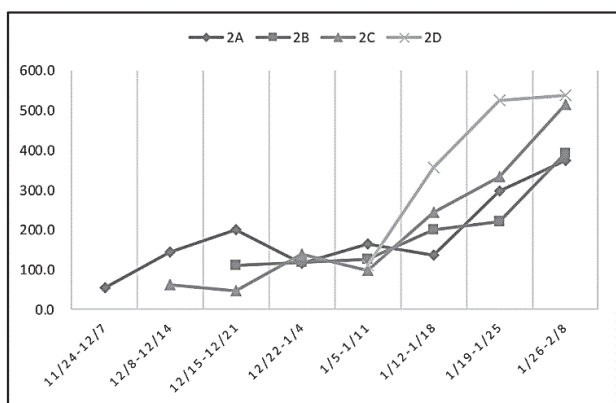


図1 自修時間の推移

まず、記録を開始した時期に差が見られた。最も早く開始したのがAクラスであり、11月25日から開始している。Cクラスは12月8日、Bクラスは12月18日、最も遅かったのは、Dクラスの1月5日からであった。早くに記録が始まっているAクラスは、同じく劇発表クラスであるC、Dクラスと比較すると後半の伸びが小さい。一方、記録の開始が最も遅かったDクラスは年明けからの活動時間が最も多く、記録を開始した後からの合計活動時間は、大体育室での運動遊びを担当したBクラスが若干少ないものの、ほぼ同時間となっていることが読み取れる。

また、幼児教育祭2回前の授業である1月26日から前日である2月9日の授業までの活動時間はいずれのクラスでも最も多い時間数となっており、幼児教育祭に向けて活動が活発になっていく様子が窺われる。この幼教祭前の自修時間の増加には、本番が近くなってきたことに加え、他の授業が終了し、特別な試験や補講がない限りは授業が入っていないことも理由として考えられるだろう。

なお、各クラスで平均自修時間が90分近く増加しているのは、Aクラスでは12月8日、1月19日の授業後、Bクラスでは、1月12日、26日の授業後、Cクラスでは、12月22日、1月12日、19日、26日の授業後、Dクラスでは、1月12日、19日の授業後であった。

## ②自修時間と到達目標に対する自信の関係性

ここでは、各クラスの到達目標に対する自信の推移と自修時間を照らし合わせることで、双方の関係性を考察する。

Aクラスの結果を図2に示す。

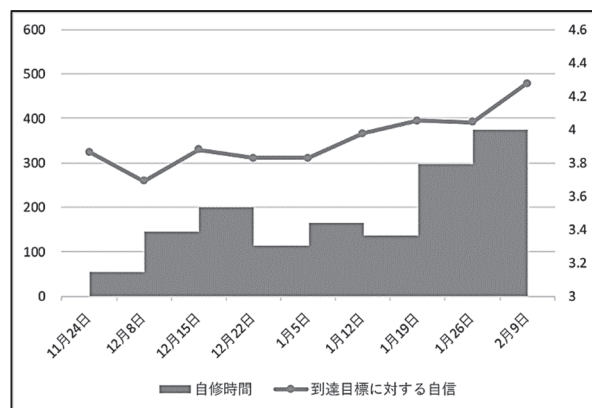


図2 自修時間と到達目標に対する自信の推移(Aクラス)

Aクラスは、12月8日と1月19日の授業後に90分以上の自修時間の増加が見られていた。全体の傾向としては、前半は増加、減少を繰り返しており、1月19日の授業後より大きく増加しているといえるだろう。到達目標に対する自信でも12月8日に下降が見られるものの、おおむね上昇と下降を繰り返し、2月9日に最高値を記録していることが読み取れる。

Bクラスの結果を図3に示す。

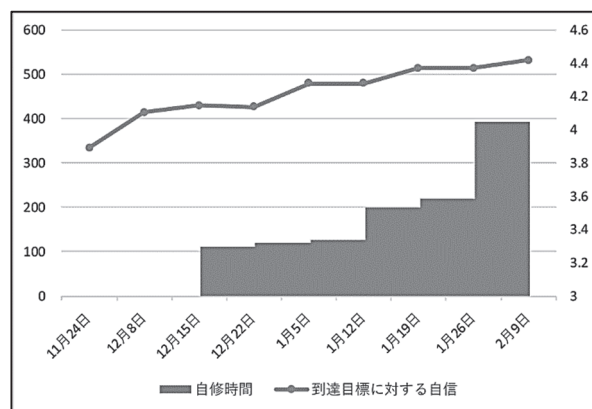


図3 自修時間と到達目標に対する自信の推移(Bクラス)

Bクラスは、1月12日と26日の授業後に自修時間が大きく増加しているものの、全体の傾向としては、徐々に増加しており、到達目標に対する自信についても徐々に高まっている。

Cクラスの結果を図4に示す。



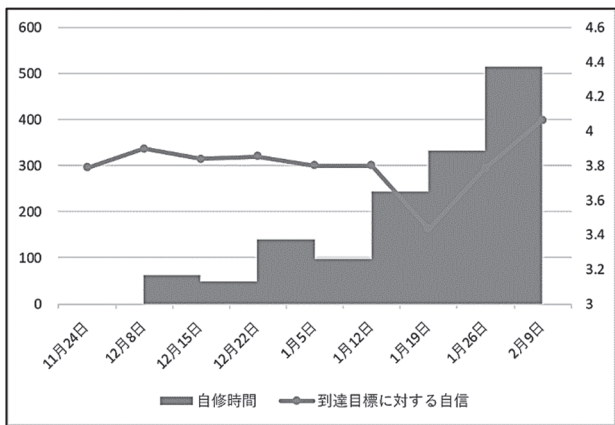


図4 自修時間と到達目標に対する自信の推移(Cクラス)

Cクラスは、12月22日と1月12日以降の毎授業後に自修時間の増加が見られた。1月12日以前の自修時間は、12月22日の増加はあるものの、その後は減少するなど、停滞気味である。到達目標に対する自信については、1月12日までは、若干の下降が続き、1月19日に大きく下降、その後V字回復している。

Dクラスの結果を図5に示す。

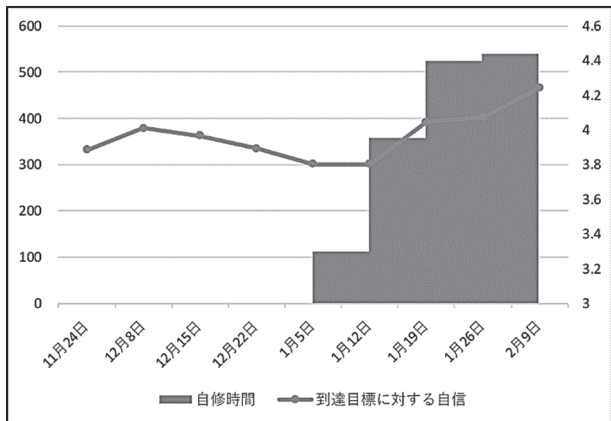


図5 自修時間と到達目標に対する自信の推移(Dクラス)

Dクラスは、1月12日、19日の授業後に大きく増加しているものの、記録が開始されたのが一番遅く、前半の自修時間の記録は取られていない。到達目標に対する自信は、12月8日から下降を続け、自修時間が大きく増加した1月12日を機に、上昇している。

以上のことから、調査をおこなった4クラスのうちBクラスでは自修時間の増加と到達目標に対する

自信に相互関係が見られた。AクラスとCクラスについても、到達目標に対する自信の上昇にズレがあるものの、おおむね同じような流れをしているといえるだろう。Dクラスについても、1月5日以前の自修時間の記録がないため、詳細はつかめていないが、1月12日以降の流れで相互性を感じる部分があることから、自修時間と到達目標に対する自信は大きな流れが相互する可能性が窺える。

とはいえ、Cクラスの1月19日に代表されるように、自修時間が大きく増加しているのにも関わらず、到達目標に対する自信が急激に低下しているなど、両者の間にズレが生じている回がある。他のクラスでも詳細にみていくと、Aクラスの12月18日では、到達目標に対する自信が低下しているにもかかわらず、自修時間が増加していたり、1月26日には自修時間が増加していたにもかかわらず自信が伸びていない。Bクラスでは1月26日に自信が伸びていないにもかかわらず、自修時間が増加している。Cクラスでも上記以外に12月22日は自修時間が増加していたにもかかわらず、自信が低下している。さらに、Dクラスにおいても、1月12日は到達目標に対する自信は高まっていなかったにもかかわらず、自修時間が大きく増加していたり、1月26日には自修時間が増加していたにもかかわらず、自信が伸びていないなど、各クラスで1~2か所存在する。この理由については、後述するクラスの活動内容と状況を踏まえて、考察を試みたい。

### ③クラスの活動内容や状況

教員の打ち合わせ記録から抜粋したクラスの活動内容と状況を表6に示す。ここでは、これまで見てきた①、②の結果にどのような背景があったのかを確認することで、自修時間と到達目標に対する自信の関係性について多角的に考察する。

表6 クラスの活動内容と状況

クラス 日付	Aクラス (SKホール)	Bクラス (大体育室)
11月24日	【活動場所決定】 (希望通り)	【活動場所決定】 (希望通らず)
12月8日	【ディスカッション】 ※配役オーディションから変更 ※テーマの変更も視野に入れて物語 を検討	【ディスカッション】 ※テーマ、グループ決定
12月15日	【ディスカッション】 ※脚本の内容について	【ディスカッション】 ※大まかな配置が確定。
12月22日	【中間発表】 ※大道具が出てきていた ※脚本に見通しが立つものの、役者 が多いこと、子ども参加の方法が課 題	【ディスカッション】 ※配置案の確認、内容がほぼ確定 【製作開始】
1月5日	【練習・製作】 ※体を動かそうとしない ※時間の使い方が課題	【製作】 ※グループごとの進捗状況を報告
1月12日	【練習・製作】 ※道具の小ささや空間の使い方など 課題がある。 ※全体的に物が足りていない	【製作】 ※今後のスケジュール確認 ・1月31日～大体育室への搬入開始 ・2月6日に迷路組み立て
1月19日	【練習・製作】 ※劇の雰囲気、流れがよくなってき ている	【製作】 ※製作場所の管理について注意 ※製作は順調
1月26日	【通し稽古】 ※指導をすぐに生かすことができな い ※大道具の改善指導	【迷路の壁製作】 ※壁の枚数を増やしたため、時間が かかった
2月9日	【リハーサル】 ※ようやく仕上がったと感じる	【リハーサル】 ※自ら課題をみつけて、改善する姿 勢がみられた
クラス 日付	Cクラス (SKホール)	Dクラス (ホワイエ)
11月24日	【活動場所決定】 (希望通り)	【活動場所決定】 (希望通らず)
12月8日	【配役オーディション】 ※主役を担当する学生が決定	【ディスカッション】 ※方向性が決定
12月15日	【ディスカッション】 ※プロットの確認 【練習】	【ディスカッション】 ※脚本完成 【配役オーディション】
12月22日	【中間発表】 ※脚本に課題 ※学生間で関係がこじれている ※焦りを感じた様子	【ディスカッション】 ※脚本を新たに作り直し 【配役オーディション】 ※脚本が出来上がらないことで、不 満が出ている
1月5日	【練習・製作】 ※体を動かそうとしない ※道具のサイズを確認	【練習・製作】 ※台本が決まりきらない ※全体的に進みづらい状況
1月12日	【練習・製作】 ※道具の小ささや空間の使い方など 課題がある。 ※挿入歌がありきたり、中盤の内容 が濃くなるとよい	【中間発表】 ※リーダーの指示がなければ動かな い状況 ※環境構成について具体的に指導 【ディスカッション】 ※現状を確認した
1月19日	【練習・製作】 ※先週から比べ、目に見える成果が 感じられない	【練習・製作】 ※反省をふまえ頑張ってきた様子 ※物語の全体の流れが見えてきた
1月26日	【通し稽古】 ※場面ごとの見直しが必要 ※衣装の改善指導	【通し稽古】 ※互いに言い合えずに不満がたまっ ている
2月9日	【リハーサル】 ※細かいミスはあったものの、概ね 良い通しができた	【リハーサル】 ※子どもの反応から自ら気づき、直 していく姿があり

まず、A クラスでは、前半にテーマの再検討して  
いるものの、中間発表では大道具が作られている。  
しかし、その後の1月5、12日の年明けにはなかなか  
活動がうまく進んでいない様子である。さらに、1  
月19日には「劇の雰囲気、流れがよくなってきてい  
る」とあるものの、再び次の授業では「指導をすぐ  
に生かすことができていない」という状況になって  
いる。幼児教育祭前日の教員の記録には「ようやく  
仕上がったと感じる」とあることから、よい時と  
悪い時をこまめに繰り返しながら進んでいる様子が  
窺える。自修時間や到達目標に対する自信について  
も上昇と下降を繰り返していたことから、これらの  
状況が直接的に自修時間や到達目標に対する自信に  
影響を与えていた様子が窺える。②で触れた、12月  
8日の到達目標に対する自信と自修時間のズレにつ  
いては、この日の授業内容が「配役オーディション」  
からテーマの変更も視野に入れたディスカッション  
に変更されていることが影響しているのではないだ  
ろうか。同じくSKホールを担当するCクラスがオー  
ディションを進める中、テーマを再検討しなければ  
ならない状況から、到達目標に対する自信が低下し  
たと同時に、遅れに対する焦りから自修時間が増加  
していると考えられる。また、1月26日については、  
「指導をすぐに生かすことができない」や大道具に  
対して改善する指導が入っている。行ってきたこと  
に対する結果が出ずに、自信が下がったのではない  
だろうか。

B クラスは、自修時間、到達目標に対する自信が  
共になだらかに上昇していた。記録を見ても大きな  
問題点に直面している様子はない。前半はディス  
カッションの時間が多く、12月22日により「内  
容がほぼ確定」している。大体育室での活動は、第  
三部のクラスと合同で実施するため、各クラスで考  
えてきたテーマのすり合わせが必要であり、その話  
し合いや配置案の打ち合わせに時間をかけている様  
子が窺える。自修時間の記録が12月15日から開始  
されていることも、大まかな配置案が決定したこと  
で少しずつ製作を開始できるようになったことから  
であろう。また、1月12日から自修時間が増加して  
いることについては、この日の授業内容に「今後の  
スケジュールを確認」とある。スケジュールを確認  
したことで、残りの時間と現状を把握し、今後の見  
通しが立った結果といえよう。また、26日のズレに  
ついては、記録によるとその日の授業内容は「迷路  
の壁製作」であり、グループでの製作は行っていな

い。また、「思ったより時間がかかった」との記録もあることから、思い描いていた活動ができなかったのではないだろうか。自修時間の増加については、1月12日の記録にあるように、31日より大体育室への搬入ができるようになったことによると考えられる。

Cクラスは、1月12日まで自修時間、到達目標に対する自信が共に停滞し、12月22日と1月12日以降の授業後に自修時間が大きく増加したものの、1月19日には大きく到達目標に対する自信が降下するという大きなズレが生じていた。まず、12月22日は、教員の記録によると、中間発表を実施した回であり、「脚本に課題」「焦りを感じた様子」とある。SK ホールの2クラスは互いに練習を見あう場面が多くある。中間発表も合同で実施しているため、Aクラスの発表には「大道具が出てきた」ことや、「脚本に見通しが立つ」状況であったのに対し、「脚本に課題」というクラスの状況に焦りを感じたのだろう。このことが自修時間を増加させた要因として考えられる。また、1月19日の自修時間と自信のズレについては、19日の教員の記録には「目に見える成果を感じられない」とあり、前述したAクラスでも見られたように、自修時間を増加させて臨んだ授業にも関わらず、「成果を感じられない」という結果に、到達目標に対する自信が降下したのだろう。Cクラスの場合は、自修時間の増加が大幅だったことから、自信の降下も著しい結果となったのでは、ないだろうか。その19日の授業後からさらに自修時間が増加している点については、12月22日と同様に、授業での結果が出せず、焦りを感じたためと考えられる。

ホワイエでのフロア劇を担当したDクラスは、自修時間の記録を開始した時期が最も遅かった。教員の記録によると、前半はディスカッションが多く、12月22日の段階で脚本を作りなおしている。「脚本が出来上がらないことで不満が出ている」や、1月5日の段階においても「台本が決まりきらない」「全体的に進みづらい状況」との残されていることから、前半での自修時間は、多く取れていないことが予想される。到達目標に対する自信が降下し続けたのもこれらの状況が影響している可能性が高い。一方、大きく自修時間が増え、到達目標に対する自信が高まる契機となったが1月12日である。1月12日は到達目標に対する自信は高まっていなかったにも関わらず、自修時間が大きく増加していた。この日の活動内容は、「中間発表」であり、記録には、「リーダー

の指示がなければ動かない状況」とクラスの状況としては良い状態ではないという記録が残されているものの、ディスカッションにて「現状を確認した」との記録もある。Bクラスにおいて、残りの時間と現状が把握したことが自修時間の増加につながったように、Dクラスにおいても、現状を確認したことが、自修時間の増加につながった可能性が考えられる。「環境構成について具体的に指導」との記録もあることから、何を行えばよいのかが明確になったことも、影響しているだろう。

また、1月26日の自修時間が増加していたにも関わらず、自信が伸びていない状況については、記録に「不満がたまっている」とあるように、思い描いていた通し稽古ではなかったことが影響しているのではないだろうか。

以上のように、自修時間の増減、到達目標に対する自信の上昇・下降、それらのズレはクラスの活動内容や状況を照らし合わせると、推測ではあるものの、その要因が見えてくることが多い。このことから、クラスの状況が自修時間の増減や到達目標に対する自信の双方に影響し、時には両者の伸びにズレを生じさせながら、相互的に上昇していくのではないだろうか。中でも自修時間については、クラスの状況に焦りを感じた時、スケジュールや現状を確認した後に増加する傾向があり、到達目標に対する自信は、思い描いていた活動ができないとき、行ってきたことの成果が表れないときに下降する傾向があることが示唆されたといえよう。

## V. まとめ

保育・教職実践演習における質問紙調査からは、授業第1回と授業第16回について、12項目中10項目について有意な差があることが示された。また、有意差が出なかった2項目についても、事前の値が高いことから、当該項目については、これまでの他の授業での経験等から本授業開始前にすでに自信があったことが推測される。この結果により、到達目標の達成については一定の成果があったことが示唆された。

自修時間の調査からは、クラスによって自修時間が増加する時期は異なるものの、いずれのクラスにおいても幼児教育祭に向けて活動が活発になっていく様子が窺われた。活動時間数については、記録が開始された後の時間数において、クラスによって大



きな差はなかった。また、自修時間と到達目標に対する自信についての関係性については、双方が相互関係にある可能性があり、クラスの状況が直接的に自修時間や到達目標に対する自信に影響を与え、双方の伸びにズレを生じさせつつも、相互的に上昇していく様子が本調査を通して見えてきた。

とはいえ、本調査で行った自修時間のデータには、記録を開始した時期が異なったという大きな課題がある。そのため、本調査で見えてきた可能性についての検証は今後の課題としたい。また、本調査では研究の対象としなかった第三部についても、調査をしていく必要があるだろう。

保育・教職実践演習（幼）の授業においては、保育現場において、すぐに活躍できる保育者を求める現代社会の要求に応えるために、また、学生自身の不安が減少するためにも、より実践的な内容を多く取り入れている。今回の研究において、授業期間中の学生の意識の向上や自信をもち始める心の成長などは分析結果から推測された。しかしながら、この授業に取り組んだ経験が保育者として働き始めてからどのように生かされているか検証することは難しい。幼稚園や保育所等へ実習訪問に出かけた際に、卒業生と再会し、教職実践演習の授業は現場で役に立っているか尋ねると、卒業生から「大変だったからこそ力になった」「あの経験があったから、仕事に行き詰まっても乗り越えられる」という声が多く聞かれる。自分自身で悩み、考え、実践したことや仲間と苦労を共にし、工夫を重ねた経験は、やはり、人を成長させていると実感している。保育・教職実践演習（幼）の体験が、保育現場でいきていることが卒業生からの聞き取りからも伺えるので、今後も継続していきたいと考えている。

## 付記

滝沢：第Ⅱ章、第Ⅲ章 1、第Ⅳ章 1、第Ⅴ章

横田：第Ⅲ章 2、第Ⅳ章 2、第Ⅴ章

野田：第Ⅰ章、第Ⅴ章

本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得たものである。

## 文献

- ・文部科学省（2017）「教職課程コアカリキュラム」中央教育審議会
- ・文部科学省（2015）「これからの学校教育を担う教

員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」中央教育審議会

- ・文部科学省（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」中央教育審議会
- ・横田典子、渡部努、滝沢ほだか、山田悠莉、野田美樹（2018）「教職実践演習における主体的な学びの効果―保育内容の指導能力の体得と保育者効力感を観点として―」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働研究』第4号 pp49-58.
- ・横田典子、滝沢ほだか、山田悠莉、平尾憲嗣、米窪洋介（2017）「教職実践演習における協同学習の効果②―使命感や責任感、他者理解や学級経営に焦点を当てて―」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第50号 pp83-92.
- ・山田悠莉、滝沢ほだか、横田典子、平尾憲嗣、米窪洋介（2016）「教職実践演習（幼稚園）における協同学習の効果―集団での学びに焦点を当てて―」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第49号 pp81-87.

## 謝辞

本論文執筆にあたり、授業運営において、平尾憲嗣先生、山田悠莉先生、米窪洋介先生、渡部努先生（岡崎女子短期大学 幼児教育学科）にご協力をいただきましたことを深くお礼申し上げます。